

## 美しき兄妹愛

——『兄さんと妹』（KHM—）に見られる

アニマとアニムスの相互補償的關係について——

梅 内 幸 信

### 第一節 アニマとアニムス

家庭というものは、まったくの他人である一人の男性と一人の女性が愛に結ばれて結婚するとき形作られる。本来、夫婦は、赤の他人同士であるがゆえに、愛の炎が消えれば、たちまち家庭の絆は断ち切られ、ときとしてそこに地上の地獄が現出しかねない。それは、夫婦から生まれた子どもたちの場合にも当てはまる。兄弟姉妹は、血の絆によって結ばれているとはいえ、そこに兄妹愛がなければ、骨肉の争いさえ生じかねない。そして、兄弟姉妹といえども、そもそも一人の男性となり、一人の女性となる運命を担っており、やがては成長して、我が家を離れ、自らの家庭を築いてゆかねばならない。ただし、この兄弟姉妹の關係は、近親相姦というタブーによって結婚が禁じられているゆえに、そこにおける異性關係は、一種独特のものであると言わざるをえない。息子にせよ娘にせよ、異性の兄弟姉妹が互いに愛情によって結ばれているにしても、相手と完全に一体になるわけにはゆかないし、また、相手を完全に他人として遠ざけるわけにもゆかない。それは、ちょうどユングの元型理論におけるアニマとアニムスの關係に似ている。この關係を、具体的な人物關係

によって象徴的に示していると思われるのが、『グリム童話集』における『兄さんと妹』(KHM 一一)である。『兄さんと妹』に登場する継母は、意地悪い魔女である。兄と妹は、この魔女の冷酷な仕打ちのために、兄は、次のように嘆き、妹の手を取って、家出を決意する。

「お母さんが死んでから、ぼくたちにはなんにも楽しいことがないね。あとからきたお母さんは、毎日ぼくたちをぶつし、そばによると、足でけとばすんだから。残りものの固いパンの耳が、ぼくたちの食事だし、これじゃ、テーブルの下にいる犬の方がましだよ。だって、今のお母さんは、犬にはときどきおいしいものをあげるんだから。こんなこと、ぼくたちのお母さんが知ったら、情なく思うだろうなあ。さあ、いっしょに遠いところに行こう。」<sup>(1)</sup>

この兄の嘆きからも分かるように、魔女は、二人の兄妹に冷たく当たるばかりではなく、暴力も振るう。確かに、継母が子どもたちに辛く当たるといふ事態は、グリム童話において、かなり頻繁に見られるものである。しかし、そういった継母であるにせよ、子どもにも暴力を振るうといふ事態は、極めて珍しい事例である。というのも、グリム兄弟は、初版以降、改訂をするごとに、家庭内暴力や性的描写など、道徳的に見て、子どもにとって好ましくないものを意図的に削除ないし書き換えたからである。<sup>(2)</sup> 暴力どころか、継母である魔女は、この兄妹を犬以下に扱っている。実際、物心のついた子どもは、自分が飼う犬以下の扱いを受けたとしたら、そのような継母のもとでは暮らしてゆくことができないであろう。ただし、継母に虐待されたとはいえ、兄妹としても、我が家を離れるに当たっては、かなりの心理的葛藤を覚えずにはいられないであろう。通常、母親は、子どもが自立できるようになるまで子どもに庇護を与えるものである。しかしながら、兄妹の実の母親は、子どもが精神的に自立できる前に亡くなったと推測される。そのため、兄妹は、実の母親から

十分な愛情を受けられなかったと考えられる。この意味において、未だ精神的に完全には母親から自立していない兄妹は、なおも母親から離れると、不安を覚える「分離不安」を抱いていると言わざるをえない<sup>(3)</sup>。しかも、その後やってきた継母が兄妹を虐待したために、兄妹は、継母とその娘には、相当な憎悪を抱いたと思われる。同じ兄妹でも、森の中に二度に互って置きざりにされても家に戻ろうとする「ヘンゼルとグレーテル」とは違い、この兄妹は、兄の方が妹を誘って家出を決意する。このことから判断すると、この兄妹は、ある程度成長し、自立も可能な年齢に達しているものと推定される。このことから判断すると、この段階で、少なくとも見積もっても、兄の方は一三歳、妹の方は一〇歳程度の年齢には到達しているものと推定できよう。

さらに、物語冒頭の描写において看過してならないことは、父親に関する言及がまったくないという点である。この事実は、父親が病死したにしろ、あるいは、まったく存在感のない父親であるにしろ、妹が男性原理、すなわちアニムスなしい「老賢人」からの影響をほとんど被っていないことを示唆している。この状態は、妹が女性として純粹無垢であることを意味しているが、しかし同時に、男性原理に関して無知な状態にあることをも意味している。この段階における妹は、男性には「娼婦」というイメージを与えるに違いない。そして、この妹が求める男性のイメージも未成熟で、妹は、「父親のような男性」を求めているとしか考えられない。一般に、アニマは、成長するにつれ、「娼婦——聖女——賢女」というイメージを与え、アニムスは、「父親のような男性——有能な男性——老賢人<sup>(4)</sup>」というイメージに変わってゆくと言われる。

二人が一日中歩き続け、野を越え、畑を越えて行くが、やがて雨が降りだすと、妹は、「神さまと、あたしたちの心が、いっしょになって泣いているんだわ」(580)と言う。雨を神の涙と見なし、神が自分たちと共に泣いていると考える妹は、その深い信仰心と落ち着いた態度からして、女性の自立の第一段階である「初潮」の時期をすでに迎えているものと

推定される。というのも、「雨」は自然の「血」であり、この「自然の血」と「神の涙」とを連想する女性は、自然の摂理とミクロコスモスである自分の肉体の生理との関連を洞察できる年齢に達していなければならない。そのような年齢は、やはり、少なくとも一〇歳程度であると推定せざるをえないであろう。

兄と妹は、悲しみと空腹と長旅の疲れから、木の洞に入り、眠り込んでしまう。次の日の朝、二人が目を覚ますと、すでに日は高く昇り、木の洞へ暑い日差しが差し込んでくる。兄は、とても喉が渴いていたので、湧き水を見つけると、その水を飲もうとする。しかし、魔女が密かに二人の跡をつけていて、森の中にあるすべての湧き水に魔法をかけていたのである。兄が湧き水を飲もうとしたとき、妹の耳に湧き水が、「わたしの水を飲む者は、トラになる。わたしの水を飲む者は、トラになる」(S.80)とささやきかける。これを聞くと妹は、「お願いだからお兄さん、飲まないで。飲んだら、お兄さんは、おそろしいけものになって、あたしを食いちぎってしまうわ」(S.80)と叫ぶ。そこで兄は、非常に喉が渴いていたにもかかわらず、その湧き水を飲むのを我慢するのである。トラになって、妹を食いちぎつてはいけなないと思ひ、大きな喉の渴きをこらえるその態度から、兄の妹に対する思いやりと愛情が理解される。兄は、二番目の湧き水を発見したときにも、その水を飲むとオオカミになると妹が言うので、なんとか我慢する。しかし、兄はこのとき、「次のわき水が見つかるまで待つよ。でも、そのときは、おまえがなんて言ったって、飲むからね。死ぬほど、のどがかわいているんだから」(S.80f)と断言するに至る。実際、兄は、三番目の湧き水を発見すると、即座にその水を飲み、子ジカに変身してしまうのである。

この一連の場面においては、森の中にある湧き水が魔法の魔法にかけられていて、その水を兄が飲めば、順次「トラ」や「オオカミ」、「子ジカ」に変身する運命にある。しかしながら、『手なし娘』や『イバラ姫』等の童話に関する解釈からもすでに判明しているように、悪魔や魔女、魔法使いによる仕業は、実際には、魔法にかけられる者の無意識の中にお

ける衝動を表していると思なざるをえない。この場面においても、トラになつて妹を食いちぎるとか、オオカミになつて妹を食べてしまうという事態は、兄の無意識の中における隠れた動物的衝動を表していると解釈しなければならぬであろう。とりわけ、兄をユング心理学の元型理論におけるアニムス、そして、妹をアニマと見なせば、この童話における兄と妹の関係から、アニムスとアニマの関係を照射する興味深い光源が立ち現れてくるのである。

## 第二節 悪感情の毒素

『兄さんと妹』における兄は、妹に対する愛情から、トラとオオカミに変身する危険性をその忍耐によつて回避したものの、三番目の湧き水を発見すると、喉の渴きを我慢することができない。容易に想像できることではあるが、この場合、「トラ」は「無慈悲と残酷」（イメージ・シンボル、六四〇―六四一頁）を、そして、「オオカミ」は「残忍と貪欲」（イメージ・シンボル、六九五―六九七頁）を象徴的に表している。これら三つの湧き水に魔法をかけていたのが継母である魔女である点を考慮に入れば、最初の湧き水には無慈悲と残酷という悪感情の毒素が注がれ、二番目の湧き水には残忍と貪欲という悪感情の毒素が注がれていたと考えられる。また、ここで「泉」が「陰門」を象徴的に示していることを加味すれば、（イメージ・シンボル、二二六―二二頁）さらに具体的な解釈が可能となる。つまり、継母から虐待されることによつて、もし、兄が継母の悪感情そのものを吸収し、継母に憎悪を抱くとすれば、その憎悪感情は、その無意識の中における動物的衝動を触発し、兄をトラにし、女性たる妹をトラのように食いちぎってしまうであろう。しかしながら、幸いにして兄には妹の願いに耳を傾けるだけの分別は残っていたのである。兄は、妹のために喉の渴きを我慢する。次に、もし兄が第二の湧き水を飲んで、残忍と貪欲という継母の憎悪感情を躊躇せずに飲んでいたら、兄は、妹をそれこそオオカミのよう

に、食べてしまったであろう。ここで注目すべき点は、心理学の分野においてオオカミが「近親相姦の恐れ」（イメージ・シンボル、六九五頁）を表しているということである。近親相姦の恐れから、またしても兄は、妹のために喉の渴きを我慢するのである。

最後に、とうとう我慢できずに兄が飲んでしまう湧き水に、果たして魔女は、どのような悪感情の毒素を注ぎ込んだというのであるのか。この湧き水を飲んで兄は、「シカ」に変身する。シカは、これまた容易に想像できるが、「敏捷さとやさしさ」（イメージ・シンボル、一七〇頁）を象徴的に示している。ここで看過してならぬ局面は、シカが同時に、「虚栄」をも表しているということである。さらに、ドレーヴァーマンの解釈によれば、ここにおける「子ジカ」は、「性の目覚め」を意味していると言われる。<sup>(6)</sup>『蛙の王さま』（KHM二）、『赤ずきん』（KHM二六）、『イバラ姫』（KHM五〇）、『白雪姫』（KHM五三）といった童話の解釈からも看取されるように、なんといっても「性的なものは、肉体的というよりは、心的に克服されねばならない」<sup>(7)</sup>のである。

兄が子ジカに変身したということは、恐らく兄の年齢とも関係していると思われる。このことから考えても、兄は「未だ子どものイメージを脱していない年齢」にあると推測される。この考えに基づくと、兄は、一三〜一五歳程度の年齢にあると推定される。子ジカに変身した兄を見て妹は、「泣かないでね、子ジカちゃん。あたしは、決してあんたを見捨てたりなんかしないから」(S81)と言う。通常の道徳観からしても、また、兄妹愛からしても、この妹の言葉は極めて当然のように思われる。しかし、この言葉を、アニメのアニメスに向けたものと見なすと、そこにはまた新たな局面が現れてくるであろう。つまり、アニメにしてもアニメスにしても、お互い相手を完全に見捨てるなどということは、不可能なのである。両者は、互いに自己実現を図るまでは、相互補償的な関係を続ける運命にある。

こうして、妹は、自分の黄金の靴下留めを子ジカの首にはめると、藁草を編んで、一本の柔らかな綱を作り、この綱を

子ジカに繋いで森の奥へと進んで行く。幼いとはいえ、子ジカの首にはめる「黄金の靴下留め」は、妹にとってかなり大切なものと考えられる。このイメージは、アニメとアニメスのあるべき関係を見事に表現していると言えるであろう。やがて妹は、森の奥にある小さな空き家を発見し、そこで子ジカと共に暮らす。妹は、子ジカのために木の葉や苔を探して柔らかな寝床を作り、毎朝柔らかい草を採ってきてやるのである。言うまでもなく、「森」は無意識の世界を象徴的に示し、その奥深くにある「小さな小屋」とは、妹の「良心」を暗示している。そうすると、その中で一緒に暮らす子ジカは、単なるアニメスではないように思われてくる。さらに、この場面において、妹が「家事」を見事にこなしている局面を見逃してはならぬであろう。この試練によって妹は、「娼婦のイメージ」を乗り越えることができるのである。

こうして、妹と子ジカは仲良く暮らしていたが、しかし、あるときその国の王が森の中で大掛かりな狩を催し、角笛の音やら犬の吠え声、狩人の陽気な掛け声が聞こえてくると、子ジカは、そこへ行ってみたいという誘惑に打ち勝つことができなくなる。確かに、子ジカに変身した兄とはいえ、むしろ、変身した子ジカの方が、兄の内面、すなわち無意識の体を如実に現していると言えよう。というのも、シカは、「虚栄」を象徴的に表しているからである。一般に、虚栄に捕われている人間は、退屈な日常生活を打ち破る「お祭り騒ぎ」に弱いものである。この兄に関する細部描写は、童話において当然のことながらなされない。そこで虚栄を表すシカに変身した点を踏まえて、兄の性格を少し探してみると、兄は遊び好きの社交家の傾向をもった人間であるように思われる。この種の人間は、まず間違いなく、好奇心が強い。好奇心に捕われて、狩の誘惑を克服できずに外へ飛びだそうとする子ジカに妹は、次のように注意する。

「日暮れにはもどってきてね。乱暴な狩人たちがこわいから、あたし、戸を閉めておくわ。兄さんだとわかるように、帰ってきたら、戸をたたいて、妹や、中へ入れておくれ、と言ってちょうだいな。そう言わないと、あたし戸を

開けないから。」(S.82)

虚栄に捕われた者は、とかく狭い所に閉じ込められていることを嫌うものである。無意識の中に抑圧された不満によって膨張させられた心は、戸外のすがすがしい空気を吸い、野原を自由に駆け回ることばかりではなく、同時に、非日常的な気晴らしをも求めないではおられない。虚栄から生まれる虚像は、はた目には蜃気楼のように、怪しい輝きをもって映るのかも知れない。それゆえ、王も狩人たちも、この美しい子ジカを追いかけろが、しかし、寸前のところで取り逃がしてしまう。この追跡場面は、三度繰り返される。ところが、二度目の追跡のとき、子ジカは足に軽い傷を負ったために、一人の狩人が子ジカを追いかけて、例の家に入る様子を目撃する。狩人がこのことを王に報告すると、次の日王は、狩人たちに子ジカを一日中追いかけておき、自分は子ジカになりすまして、妹のいる家に入り込む。すると王は、その娘の美しさに驚き、この娘を自分の妃に迎えるのである。

子ジカは、妹のいる小屋の中へ入れてもらいたいときには、戸を叩いて、「妹や、中へ入れておくれ」(S.82)という合言葉を言わなければならない。子ジカがこの合言葉を言つて中へ入れてもらう光景を王の狩人が目撃して、このことを王に伝えていたのであった。実際、この小屋が妹の良心を象徴的に示しているとすれば、この合言葉は、心の秘密を解く重要な鍵の役割を果たしている。つまり、アニメとアニメスとが出会う場所は、無意識の中に秘められた良心以外にはないと考えられるのである。似たような場面は、『ラプンツェル』(KHM一二)にも見られる。ここでは、ラプンツェルの歌声に魅せられた王子が、女魔法使いの声をまねて合言葉を言い、ラプンツェルのお下げ髪を伝つて、ラプンツェルのもとへと行き着くのである。王子とラプンツェルとの出会いから、当初、二人の不幸が始まるのであるが、しかし、その試練を乗り越えたとき、二人は、真の意味において自己を実現し、幸せになるのである。同様に妹も、王と出会つて

結婚し、息子が生まれたときから試練が始まる。とはいえ、その試練を乗り越えたとき、同じく二人は、幸せになるのである。息子が生まれたとき、夫婦の試練が始まるというパターンは、『手なし娘』(KHM三二)においても見いだされる。

### 第三節 美女と野獣

子ジカに変えられた兄と、この動物に付きそう妹という組み合わせを考慮に入れるとき、有名な「美女と野獣」というモチーフが容易に想起される。このモチーフは、世界各地に散見されるものである。一般に、王子は、魔法の力によって野獣の姿に変えられている。他方、美女の方は、最初外見のみから判断して、この野獣を嫌う。しかし、やがてこの野獣の心の優しさに気づいて、この野獣を心から愛するようになったとき、魔法が解けて、野獣は美しい王子に変わるのである。ここで注目しなければならないことは、美女の方の心的向上が重要な役割を果たしているという局面である。これを心理学的に考察してみれば、美女は、父親との関係においてコンプレックスをもつ女性である。(イメージ・シンボル、五二―五三頁) 父親が親切にもてなされた野獣の館で、娘に望まれたバラを盗むが、このことは、父親に甘える娘と、娘を自立させずに自分のもとに繋ぎ止めておきたいという父親の関係を暗示している。このファーザー・コンプレックスを克服したとき、美女は、親切な野獣の実体を見抜き、野獣を愛するようになる。この愛の絆によって野獣は、もとの美しい王子の姿に返るのである。

この美女と野獣に類する物語を、近代の童話集の先駆者と言えるペローが伝えている。それは、一六九七年に出版された『過ぎし昔の物語ならびに教訓』に収録されている『まき毛のリケ』と題された童話である。この童話には、ペロー独自の脚色が施され、最後に教訓が添えられている。

ある国の妃が「猿みたいな醜い子を生んで」（二二六頁）、ひどく嘆き悲しんでいると、誕生に居合わせたある仙女が、「この子は非常な才智の持主になるので、人に好かれないではないだろうか」（二二六頁）と慰める。事実、この仙女の言う通りになる。この男の子は、生まれたときから頭にトサカのような小さなまき毛の房があったので、「まき毛のリケ」（二二六頁）と名づけられる。それから七、八年経って、隣の国の妃が二人の女の子を産む。最初の女の子は、「お日さまより美しい」（二二六頁）ので、妃は大いに喜ぶが、例の仙女は、その子は「お馬鹿さんになるだろう」（二二七頁）と告げる。二番目に生まれた女の子は、「並はずれて醜かった」（二二七頁）が、仙女は、「あなたの娘さんは別の面で埋め合わせがつかます。いまに才気あり余って、美しさに欠けていることなど、ほとんど誰も気にとめなくなりましょう」（二二七頁）と予告するのである。そこで妃が、美しいが知恵に乏しく、白痴美である上の娘のことを心配すると、仙女は、妃にこう約束する。

「知恵の面ではなんともなりません、美しさの面でならなんとでもしてさしあげられます。王妃さまにご満足いただけることなら、なんでもさせていたただきたいと思っておりますので、王女さまの気に入られた人を、美男や美女に変える能力をおさずけしましょう」（二二七頁）

こうして、妹の方は目に見えて醜くなり、他方、姉の方は日に日に愚かさを増すばかりであった。美しいことが女性にとって大きな強みになるとはいつても、社交の場では、才智溢れる妹の方が最終的には多くの人々の関心を引くのであった。そこで美しいが、しかし、愚かな姉の方は、死にたくなるほどの辛い思いを味わざるをえなかった。ある日、この上の姫が森の中で自分の不幸な身の上を嘆いていると、姫の肖像を見て、恋をしてしまったまき毛のリケに出会う。リケ

は、姫の美しさを讃えるが、しかし姫は、「わたくしのように美しくても愚かであるよりは、あなたのように醜くても才智のあるほうが、ずっとましだと思いますわ」(二三〇頁)と応える。才智がないために死ぬほどの苦しみを味わっているということを姫がリケに打ち明けると、リケは、姫に対してその悲しみを終わらせることができると言う。その方法を姫がリケに尋ねると、リケは、姫に対して、次のように語るのである。

「わたくしにはあるのです、自分がいちばん愛するようになるひとに、およそ人間が持てるかぎりの知恵をさずける能力が。そして、王女さま、あなたこそ、そのおひとなのですから、人間が持てるかぎりの知恵をお持ちになれるかどうかは、まったくあなた次第、わたくしと結婚してくださるかどうかによります」(二三〇―三二二頁)。

知恵を授かりたいと強く望む姫は、一年後の同じ日にリケと結婚する約束を交わす。すると姫は、見違えるほどの変貌を遂げる。美貌に加えて才智をも身に付けた姉の姫は、宮廷中の人々の注目を浴びる。こうなると、醜くても、その才智によって人々の関心を引いていた妹の方は、「まことにみぐるしい牝猿にしか」(二三二頁)見えなくなってしまうのである。今や才色兼備となった上の姫は、諸国の王子たちに求愛されることとなる。しかし、王子たちは、一人として才智を備えていると思われなかったので、結婚の約束を交わすことはなかった。ところが、「とても勢力のある金持で、頭のいい、容姿のすぐれた」(二三三頁)王子が現れると、姫の心は揺らいでしまう。熟考するために森の中へ入ると、姫は、リケ王子の結婚式の準備をしている人々に出会う。やがて、姿を現したリケ王子は、姫が自分との約束を果たすために森にやってきたのだと考える。ところが、姫は、自分が愚かだったときに決心がつかなかったし、知恵を授けてもらった今は、益々決心がつかないと言って、リケ王子との結婚に躊躇する。するとリケ王子は、「この醜さは別として、わたくし

になにかお気に召さない点があるのでしょうか。わたくしの生まれ、知性、性質、態度にご不満がおありですか」（二三五頁）と、姫を問い詰める。これに対して姫は、なんの不満もないと答える。そこでリケ王子は、姫に向かって、「わたくしをどんな男より魅力ある者にすることが、あなたにはおできになるのですから」（二三五頁）と告げる。これを聞いて怪訝な顔をする姫に対して、リケ王子は、例の仙女が「そうしてあげたいとお思になれば、愛する人を美しくする力を、あなたにもさずけてくれたのです」（二三六頁）と説明する。これを聞いて姫は、決意して次のようにリケ王子に答える。

「あなたがこの世でいちばん美しく、いちばん魅力ある王子さまになれるよう、心から願います。そして、わたくしの力の及ぶかぎりのものを、あなたにおおくりしますわ」（二三六頁）

こう言い終わると、姫の目には、リケ王子が「それまで見たこともないほど美しい、姿形のいい、魅力のある男性」（二三六頁）として映るのである。しかしながら、ペローの解説によれば、リケ王子自身が美しくなったというよりは、姫の物の見方が変わったのだと言わざるをえない。つまり、姫の心的な、あるいは人格上の発達によって、認識力が高まり、これによって姫は、醜いリケ王子の中に真の男性の魅力を認知したのである。ペローは、ユーモアを交えて、姫の心境の変化を次のように解説している。

「これは決して仙女の魔法が効き目をあらわしたのではなく、愛の力だけがこのような変身をもたらしたのだ、と確信している人たちもいます。そういう人たちによれば、王女は恋人の辛抱強さ、思慮深さ、その心と知性のあらゆる

る長所についてよく考えたので、もはや不格好な身体つきや、顔の醜さなどが目につかなくなり、背中のこぶも、背を丸めた男の品のいい様子としか見え、それまではひどく片足を引いて見えたのが、いまではすこし体を傾けて歩く魅力ある姿としか、王女の目には映らなくなったのだ、ということ。そのうえ、やぶにらみの目さえ、王女にはかえっていつそう輝いて見え、焦点の合わないのも、激しい恋のしるしと思われ、大きな赤い鼻も、なにかしら雄々しく、英雄的に見えたのだ、とさえいっています。」(二三六―二三七頁)

この『まき毛のリケ』という童話は、愛が愛する者の心を変え、それと同時に、愛される者の心を変える力をもっているということを見せていると言えよう。愛の力は、まず人間の内面の世界を変える。すると、豊かで美しくなったその内面の世界は、外面の世界にも影響を与え、その外面を豊かで美しくするのである。宮廷での処世術を学び、その童話集に教訓まで付け加えているペローを、ここであえて弁護しておけば、才智はあるものの、牝猿のように醜い妹である姫は、才智のない美男の王子と結婚したと、十分推測される根拠が見いだされるのである。

この「美女と野獣」のモチーフにおける両者の関係を、美女に欠けている才智を野獣が補い、野獣に欠けている美しさを美女が補うという具合に、相補的なものと見なすこともできるかも知れない。この関連において、『兄さんと妹』における兄妹の関係は、一層明確に相補的と見なされる特徴をもっている。

#### 第四節 アニマとグレート・マザーの否定的側面

「森」は、無意識の世界を象徴的に表している。従って、この森の中で狩りをする王は、すでに「有能な男性」という

イメージを読者に与える。さらに、子ジカになりすまして、小屋の中に入り込み、妹を妃として迎えるという一連の行動から判断して、王は、「老賢人」への道を歩み始めているという印象をも与える。他方、兄の方は、虚栄に駆られて、狩の様子を眺めたいという誘惑に打ち勝つことができない。兄は陽気な社交家の傾向をもっているが、この外向的な兄が、この物語において王を妹の所へと連れてくる役割を担っている点を看過してはならぬであろう。この意味において、アニムスは、アニマを危険に陥れる可能性をもっているものの、しかし、他方では、アニマに幸福をもたらすものでもあると言わねばならない。

妹が王と結婚して幸せに暮らしているという噂を耳にはさむと、魔女である継母とその娘は、嫉妬に捕われ、心安まらず、兄と妹をなんとか不幸に陥れてやろうと陰謀を企む。この魔女の娘の邪悪さは、「二目と見られないほど醜くて、片方の目しかありませんでした」(58) という外見の描写によって表されている。魔女とその娘は、妃が男の子を産んだ機会を捉えて、策略を企む。魔女は、妃の侍女になりすますと、体力が弱っている妃に対して、風呂に入れば元気がでると偽って、風呂に入ることを妃に無理強いする。だまされた妃が湯槽に入ると、魔女とその娘は、風呂場の戸を閉め、風呂の火を地獄のように焚き付けて、妃を殺してしまうのである。

「風呂場」は、「沐浴」を連想させる。この沐浴は、「再びもとの、まだ未発達の状態へ回帰し、蘇生し、生まれかわり、再生すること」(イメージ・シンボル、四七―四八頁)を意味している。また、この関連において沐浴は、母親の胎内を連想させる。そして、そこで使われる「水」ないし「湯」は、「羊水」を連想させる。ところが、妃は、「再生」を象徴的に意味している風呂場で、魔女とその娘によって殺されてしまうのである。この風呂場での死は、やはり、「再生」を前提にしていると考えざるをえない。それというのも、確かに妃は、死んだ後三度に亙る試練を受けねばならないが、しかし、この試練を乗り越えたとき、グレート・マザーに生まれ変わるからである。

継母は、一般に童話においては残酷で意地悪な役割を担っているが、このことはこの童話においても例外ではない。とはいえ、ユングの元型理論を考慮に入れるとき、この魔女がグレート・マザーの否定的側面を代表し、そして、魔女の娘がアニマの否定的側面を代表していることが理解される。アニマの肯定的側面を代表している妹は、アニマの否定的側面とグレート・マザーの否定的側面による試練を乗り越えて、最終的なペルソナを実現しなければならぬのである。

魔女は、自分の娘を妃にすべく、醜くて不具の娘に頭巾を被せ、妃のベッドに寝かせる。しかも、片方の目しかないとを王に気づかれないように、娘には、目の無い方を下にして眠らせるのである。息子が生まれたことを喜んだ王が妻の様子を見ようとすると、魔女は、「とんでもございません。カーテンをお閉めあそばせ。お妃さまに、まだ日の光は毒でございます。お休みになりませんと」(S.85) という口実を設けて、王を妃から遠ざける。まさしく魔女とその娘は、闇の世界の住民と言わざるをえない。その醜い実体を隠すために、闇の住民は、光の当たらない場所を好み、真実の姿を照射する光を忌み嫌うのである。闇の世界の住民の嘘を見抜けず、魔女の術中にはまってしまふ王は、やはり、この時点では「有能な男性」であるものの、決して「老賢人」というイメージは与えない。

殺された妃は、息子と子ジカのことを心配し、真夜中になると、霊となって現れ、子どもにお乳を与え、子ジカの背中をなでてやる。妃の霊は、こうした後に無言のうちに再び戸口から出て行くのであったが、しかし、ある夜、乳母は、妃の霊が次のように言うのを聞くのである。

「わが子は、どうしているかしら。子ジカは、どうしているかしら。

わたしがくるのは、あと二度かぎり、それっきりよ。」(S.85)

すると、乳母は、目撃したことを一切切王に報告する。これを聞いた王は、その夜起きていて、子どもの傍に付いていることを決意する。その夜、王は、乳母が報告した通りの情景に出会うのであるが、妃の霊に声を掛ける決断をするには至らない。三回目の夜、王は、子どもと子ジカへの思いやりと愛情に満ちた妃の姿に胸が一杯になり、思わず妃の霊に「そなたは、まぎれもなく、わしの愛する妻じゃ」(S.86)と声を掛ける。これに対して妃の霊は、「はい、わたしは、あなたさまの妻にございます」(S.86)と答える。その途端に神の恩寵が与えられて、妃は命を取り戻し、「みずみずしく、血色の良い、元気な姿」(S.86)になるのである。

それにしても、王が三度目の夜に妃の霊に声を掛け、妃の霊がその呼びかけに答えるとき、なぜ神の恩寵が与えられるのであろうか。これと似た場面は、『手なし娘』(KHM三一)において見いだされる。この物語において手なし娘は、父権の下にあつて自己を見失っていたのであるが、やはり時が経つと、自己を確立しなければならないという強い衝動に駆られる。自分の家を出るといふ決意によって娘は、次の段階に到達する。王と結婚して娘は、銀の手をもらうが、これもある意味においては、夫に無条件に従順であることを強要されていると解釈される。やはり、もう一度無意識の世界を体験し直すことによつて、真の自己を見つめ直す必要がある。この意味において、妃が息子と共に、森に入つて七年間生活することは、彼女の自己実現には不可避の過程なのである。手なし娘は、父親に虐げられた自分と王に従順な自己を見つめ直すことによつて、自分のシャドウ、すなわち自分の影の部分を理解するのである。そして、無意識の象徴である森の中に入り、自分が妃であることと同時に、母親であること、すなわち「おとしよりのおかあさま」のように、グレート・マザーにならなければならないことを悟るのである。

他方、王の方は、一体なぜ七年もの間放浪生活をしなければならなかったのであろうか。妃が立派な男の子を産んだといふことを知らせる手紙は、悪魔の仕業によつて、醜いかたわの子を産んだといふ手紙に替えられ、また、妃を大切に世

話をするようにという手紙は、妃を子どももろとも殺すようにという手紙に替えられる。これらの手紙を託された使者は、小川の傍で眠り込んでしまうのであるが、このことが実は、手紙の内容が王の無意識の世界で起きている出来事であるということを暗示している。この場合悪魔とは、粉ひきの場合と同様に、他でもない王の心の中に潜む悪の原理を指し示している。つまり、王の心の中に潜む悪しき心は、かたわの子が産まれたら妃もろとも殺してしまいたいと思っていたのである。実際、魔がさしたということかも知れないが、心の奥底でそのように思う自分が存在したのである。この意味において、王は自分の影の部分であるシャドウに気づいていないし、また、王としての自分のペルソナを正しく認識し、克服していたとも思われない。それというのも、手なし娘を妃にしたその理由は主として同情からであるし、結婚してからも妃に求めるものは貞節ばかりである。従って、彼はよく帝王学を教え込まれているとはいっても、やはり家父長制の上に安住していると言われても仕方がない。王も、もう一度無意識の世界に戻って、真の自己を見つめ直す必要がある。こうして、王も七年間旅に出る定めにあるのである。

さて、深層心理学の観点から考えると、女性における未発達の異性原理であるアニムスのイメージは、女性の人格の成長に伴って、父親のイメージからやがて有能な男性のイメージ、老賢人のイメージへと変わってゆくと言われている。実際、手なし娘も、初めは父親のイメージに従い、次に王という有能な男性のイメージに従い、最終的には七年間の放浪の果てに「野蛮な男」(S157)となった老賢人のイメージに従うのである。他方、男性における未発達の異性原理であるアニマのイメージは、男性の人格の成長に伴って、娼婦のイメージからやがて聖女のイメージ、賢女のイメージへと変わってゆくと言われている。この考えに従うとすれば、王は同情から手なし娘を城につれて行くが、その段階では手なし娘に娼婦のイメージを求めていたということになるのかも知れない。そして、妃に銀の手を与える段階においては聖女のイメージを求め、七年間の放浪を経て、切りとられた手首が元のように生えた妃に森の中で出会って、初めて賢い女性のイメージ

ジを求めたと解釈されるのである。

## 第五節 アニマとアニムスの相補関係

『手なし娘』における妃と王の人格的成長過程を踏まえれば、『兄さんと妹』における妃と王の関係も、人格的成長の一過程を暗示していると考えられるであろう。つまり、王の妃となり、息子の誕生を契機として、妃は、今や「聖女」から「グレート・マザー」への道を歩まねばならないのである。他方、王も、本当の妃を失い、偽の妃を与えられるという試練を通じて、今や「老賢人」への道を歩まねばならないのである。王の試練は、三度に亘っている。それは、妃の息子と子ジカの世話に関わるものである。王は、妃が真夜中に城へやってくるという話を乳母から聞き知る。間接的に他人から聞き知るこの情報に関し王は、「対自的判断」しか下すことができない。当然のことながら、その情報の真偽に関して疑念も生じざるをえない。続いて王は、物語の中では慎重に読まなければ見落としてしまいがちであるが、乳母と共にこの事実を確認する。この事実に関し王は、「共自的判断」を下す。この時点で王は、かなりの認識に到達しているが、即座に行動に移せるほどまでには至っていない。しかし、三度目に王は、乳母が居合わせようと居合わせまいと、妃の来訪に関し「即自的判断」を下している。これによって王は、即座に行動できるほどまでの認識を獲得しているのである。この認識の三段階は、まさに「父親のような男性」「有能な男性」から「老賢人」へと移行する試練であると言えるであろう。

『手なし娘』における王が妃に与えた「銀の手」によって妃を認知するのと同様に、『兄さんと妹』における王は、妃の子どもと子ジカに対する思いやりと愛情によって妃を認知する。「聖女」のイメージに留まっていたアニマ(妃)は、

「有能な男性」のイメージに留まっていたアニムス（王）の「愛の認知」によって、それぞれ、グレート・マザーと老賢人へと成長してゆくのである。妃は、魔女とその娘の陰謀によって殺され、王や息子、子ジカから離されるという試練を通じて、今や「聖女」のイメージを脱して、「グレート・マザー」への道を歩み始めるのである。

ところで、ヨランダ・ヤコービは、その著書『ユング心理学』の中で、アニムスとアニマの関係について、次のように述べている。

無意識的な心の種々の側面や特徴が相互にまだ区別されていず、はっきりと分化されていず、意識に結びつけられていないあいだは（たとえば人が自分の影を知らないでいるあいだは）、男性の無意識の総体は女性的な徴候を有し、女性のそれは男性的な徴候を有する。すなわち無意識の中のすべては、男性的ないし女性的な性質によっていわば色づけられているのである。それゆえユングも、この性格特徴を目だたせようという場合に限って、無意識のこの領域をそのものずばり単にアニマないしアニムスと呼んでいる。従ってペルソナが硬直すると、換言すれば一機能、すなわち主要機能のみが分化して、他の三機能がまだ多かれ少なかれ未分化であるような場合には、アニマは当然この三機能の混合を表示することになるだろう。だが分析が進んでくると、すなわち二つの副次機能の発達につれてアニマは次第次第に、もっとも暗い第四の機能、すなわち劣等機能の形態化されたものとして現われてくるようになる。また影がまだ未分化である場合、すなわちそれがまだ完全に無意識の深みにとどまっている場合も、影はしばしばアニマの諸特徴と混り合っている。以上のような場合、われわれは夢において、三つ一組の影形象に出会う。これらはいわばまだ意識されていない三機能に属しているわけである。同様にまた三つ一組のアニマないしアニムス形象に出会う。このような混合は同時にまた、夢の中では、一つの影形象と一つのアニマないしアニムス形象との組合せ、一

種の「対状態」、一種の「結婚」となって現われることもある。<sup>(10)</sup>〈

このヤコービの解説からも分かるように、男性の無意識の中にあつてアニムスが助長されてアニマが抑圧され、他方、女性の無意識にあつてアニマが助長されてアニムスが抑圧される。人間の成長において、この傾向がとりわけ強められるのは、思春期においてであると言えよう。いずれにしても、ヤコービのアニマとアニムスの関係に関する解説から明確に理解される点は、「結婚」にも譬えられるような、その相互補償的な関係である。ここで看過してならぬ局面は、アニマとアニムスの在り方が、ペルソナの在り方と関連しているということである。このことを踏まえれば、女性と男性の自己実現は、次のように図式化されると考えられる。

- 一、女性の場合…実現されるペルソナ＝自分の無意識の中にある女性原理＋抑圧されているアニムス
- 二、男性の場合…実現されるペルソナ＝自分の無意識の中にある男性原理＋抑圧されているアニマ

つまり、女性にせよ男性にせよ、人間が自己実現を図るためには、異性ないし異性原理を必要とすることが判明する。ただし、ここで注意しなければならないことは、このアニマとアニムスの関係が、単なる相互補償的なものに留まらず、場合によっては、相手を消滅させる危険性をもったものでもあるということである。とりわけ、アニムスは、その粗野な本性によって、それこそトラカオオカミのようにアニマを食いちぎってしまう危険性を秘めている。しかしながら、対極的位置に立つアニマとアニムスのこの関係こそが、同時にそのエネルギーを生み出す根源でもある。従つて、アニマにせよアニムスにせよ、自分の特質を自覚すると共に、お互いに相手の特質をも理解することによって、自己の無意識におけ

るエネルギーを最大限引きだし、効果的に利用することを心がけねばならない。

## 第六節 美しき兄妹愛

魔女とその娘の意地悪な仕業を妃から聞くと王は、二人を裁判にかける。その結果、「二人に判決が言いわたされ、魔女の娘は、森の中へつれて行かれて、どうもうなげものたちに食いちぎられ、また魔女は、火あぶりになり、みじめにも焼き殺されて」(S86) しまうのである。この一見残酷な処刑は、『白雪姫』における継母の処刑、あるいは『灰かぶり』において義理の姉妹たちが鳩によって両目を潰されてしまうという天罰と同様に、『兄さんと妹』における妹が、自己の無意識における女性原理の否定的側面を克服する過程の具体的描写であると解釈しなければならぬ。

この童話において、兄がユングの元型理論におけるアニムスに相当するとはいうものの、この童話には、もう一人アニムスに相当する人物が登場する。それは、王である。妹がこの王と結婚するところから、この王が本来のアニムスに相当する。しかしながら、妹が、ややフアーザー・コンプレックスに罹っていると思われる状態にあることを考慮に入れば、妹と結婚する王は、アニムスの「有能な男性」というイメージよりは、むしろ、「父親のような男性」のイメージを漂わせている。兄は、アニムスに相当する役割を果たしながらも、近親相姦への恐れから妹とは結婚できない。この意味において、兄は妹との関係においては、決して大人になることはできない。この兄は、虚栄に駆られ、外向的で、お祭りが大好きである。これに反し、妹の方は、謙虚で、内向的で、孤独を好む。両者は、まさに正反対の性質をもつが、他でもないこの兄が、王を森の小屋へと誘うのである。この兄の外向的な性質が欠けていれば、妹も、王と結婚する機会を得ることとはなかったのである。「子ジカ」として、やや未成熟な人間として描写されている兄は、このように考察してみると、

妹の無意識の中で抑圧されているアニムスを暗示しているように思われてくる。妹ばかりではなく、女性は、一般にこのアニムスから逃れることはできない。従つて、女性は、自己実現を図るためには、己の無意識の中にあるアニムスを育て上げなければならぬのである。この局面から男女の恋愛関係を考察してみると、女性は、その無意識の中にあるアニムスの働きによつて男性を惹きつけ、その女性原理によつて男性を魅了するという仮説が可能となる。つまり、女性は、その女性原理だけでは男性を惹きつけることはできないのである。女性がマイナス電気であつて、男性がプラス電気であるとするれば、本来マイナス電気とプラス電気は、即座に引き付けあはずであるが、人間の恋愛関係にあつては、性質上反発しあうプラス電気とプラス電気との誘発があつて初めて、マイナス電気とプラス電気は結び付くと考えられるのである。

このように、人間の無意識の中に秘められたアニマとアニムスの関係を考察するとき、その関係は、運命的な関係を想起させる。さらに、この関係を地軸のN極とS極の関係、太陽系に存在する星々の関係、銀河系の中の星雲同士の関係へと敷衍してみると、人間の男女の関係は、自然の摂理を反映したものであるとも言えるであろう。男性と女性の関係は写真の陽面に当たるが、他方、男性と女性の無意識の中におけるアニマとアニムスの関係は写真の陰面に当たるであろう。童話は、まさしく陰画の世界である。

この童話が『兄さんと妹』という表題をもち、また、次のような言葉で結ばれていることから分かるように、この童話において、その陽画の方には、妹と王に関してグレート・マザーと老賢人への道を歩むべく運命づけられた「アニマとアニムスの相互補償的關係」が描かれている。これはまたこれで、美しい夫婦愛の描写である。しかし、もう一方の陰画には、兄妹が互いの成長を願う、まさしく一心同体の「アニマとアニムスの相互補償的關係」が描かれているのである。このことを示唆するかのようには、物語は、次のように締めくくられる。

「魔女が焼かれて、灰になると、子ジカは、元の人間の姿にもどりました。こうして、妹と兄さんは、死ぬまでいっしよに幸せに暮らしました。」(S.86)

妹の無意識の中に秘められた「アニメとアニメスの相互補償的關係」は、妹と兄の兄妹愛として描写されているが、それは「美しき天然」ないし「美しき兄妹愛」と形容しても、決して形容過多にはならないであろう。

注

(1) Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 3 Bde., Philipp Reclam jun. GmbH & Co., Stuttgart 1980, 1. Bd., S.79-86.

以下、この童話からの引用に関してはこの版に従い、本文引用末尾に頁数を付す。なお、翻訳に当たっては、次の最終版の翻訳を参考にさせて頂いた。『グリム童話集(一)』金田鬼一訳、岩波書店(文庫)、一九八二年、一二二—一二三頁。／『完訳グリム童話』(一—七)第一巻、野村法訳、筑摩書房、一九九九年、一〇九—一一三頁参照。

『兄さんと妹』は、エーレンベルク手稿におけるテキストと、初版におけるテキストとは、かなりの違いがあると言われる。しかしながら、この童話を収集したヤーコプ・グリム自身の注釈に拠れば、いずれのテキストも、マイン地方の話であると言われる。(Vgl. Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen: a.a.O., 3. Bd., S.32f., S.446) その他『兄さんと妹』の類話については、J・ボルテとG・ポリーファの詳細な注釈を参照のこと。(Vgl. Bolte, Johannes / Polivka, Georg: Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm. 4 Bde., Georg Olms Verlag, Hildesheim · New York 1982, 1. Bd., S.79-96)

(2) Vgl. Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Hrsg. v. Heinz Rölleke. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main 1985, S.1158-1163.

初版から第七版に至るまでの改正に関して、グリム兄弟の生涯についての詳細な伝記を記したG・ザイツは、次のように要約している。「改作の最も重要な文体上の特徴としては次のような点が挙げられる。すなわち、間接話法を直接話法に入れ替えること、

縮小形の導入、古風な言い回し、民衆的な二重表現、慣用句と比較、頭韻の結合、ことわざ諺と擬音である。さらに、ヴィルヘルムはストーリー経過のより明確で豊かな動機づけ、より動きのある気分気分に満ちた状況描写を求めて努力した。しかしまた、内容的な変更も彼はもくろみ、性的にいやらしいと感じられるかも知れない箇所を除去しないしは書き換え、またキリスト教的な価値観念によって規定された補足部分を挿入した。(ガブリエーレ・ザイツ『グリム兄弟』高木昌史・高木万里子訳、青土社、一九九九年、一四二頁)

- (3) 『誠信 心理学辞典』誠信書房、一九八四年、四〇二頁。ここには、次のような説明が載っている。「子どもが母親から離され、孤立するときの反応。落ちつかず、いらいらし、無力感を示す。これらの反応は、一般に子どもが母親から離れ独立しようとする前駆症状とみなされる。しかし、母親を失うのではないかという不安や危機感を強くともなう場合は正常とはいえない。」
- (4) 石井慎二編『夢の本』JICC出版局、一九八二年、二〇一―二二頁参照。
- (5) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、一九八八年、五一六頁、六七―七〇頁参照。以下、この事典からの引用・参照に関してはこの版に従い、「イメージ・シンボル」と略記して、本文引用末尾に頁数を付す。
- (6) Vgl. Drewermann, Eugen: *Brüderchen und Schwesterchen*. Walter-Verlag, Olten und Freiburg im Breisgau 1992, S.43.
- (7) 拙著『童話を読み解く——ホフマンの創作童話とグリム童話の民俗童話——』同学社、一九九九年、四七七―四八五頁参照。
- (8) 『ペロー童話集』新倉朗子訳、岩波書店、一九八二年、二二五―二三八頁。以下、この童話からの引用に関してはこの版に従い、本文引用末尾に頁数を付す。
- (9) 拙著、上掲書、四〇七―四一八頁参照。
- (10) ヤコービ、ヨランダ『ユングの心理学』高橋義孝監修、池田紘一・石田行仁・中谷朝之・百溪三郎共訳、日本教文社、一九八〇年、二二六―二二七頁。
- (11) 同書、三九二―四〇六頁、三五二―三七〇頁参照。